

佐賀保育園児が伊与木川で稚アユ放流

4月22日(金)、伊与木川で佐賀保育所の園児21名が稚アユの放流を行いました。同取組は、稚アユの放流を通じて子どもたちが川に興味を持ち、親しみ、川を守ろうと思ってもらうことを目的として「伊与木川を守る会」の主催により平成24年から行われており、今回で9回目。約3千匹の稚アユを放流しました。



アユを放流する園児ら

同会の明神照男(てるお)会長は、「生き物が元気に生き残るための取組を真剣に考えるきっかけになれば嬉しい。今まで私たちが汚してきた川をきれいな川に戻すことを伝えたい」と話しました。

佐賀保育所の澤田寧々(ねね)さんと境藍志郎(あいら)さんは、「元氣そうに出発していった。大きなアユになってほしい」と話しました。

ビーチクリーンアップ大作戦

5月14日(土)、田野浦海岸で「ビーチクリーンアップ大作戦」が行われ、町内外から26名が参加しました。同イベントは、損害保険ジャパン株式会社と全国のNPOなどが協働で実施している「SAVE JAPANプロジェクト」の一環としてNPO高知市民会議の主催で行われ、黒潮町での開催は初めてのこと。



砂浜の清掃をする参加者

田野浦海岸の清掃では、プラスチックの破片やペットボトルのキャップなど、合計27・1kgのごみを拾いました。

また、清掃後にはNPO砂浜美術館の職員によるクジラの話聞いた後、クジラのペーパークラフト作りが行われました。

イベントに参加した高知市の小松麻里香(まりか)さんと優心(ゆうこ)さんは、「海をきれいにしたいと思って参加した。想像より細かなゴミが多かった。今までは拾うことをためらっていたが、これからはきちんと拾って話したい」と話しました。

まほろば Vol.17 くるしお

「まほろば」とは、素晴らしい場所・住みやすい場所という意味。まほろばな黒潮町で頑張る人や団体にスポットを当て、紹介するコーナーです(隔月掲載予定)。



おくと のぶ 竹細工職人 澳本 信男さん

町内唯一の竹細工職人である澳本さん。竹を取り、小刀を使いながら加工し、1つひとつ手で編みながら日用品や漁具などを作っています。作る物によって編み方を変えながら丁寧に仕上げられる商品には、「お客さんに喜んでほしい」という思いが込められています。

入野漁港にある小さな工房で、日々竹細工を作っている澳本さんに話を聞きました。

竹細工を始めたきっかけとこれまでの経緯は？

小学生の頃に父の手伝いでカゴやざるを作ったのが始まりです。昔は冷蔵庫などがなく、食べ物や冷やす時に日の当たらない涼しい軒下に吊るすことが多く、私も当時、その軒下に吊るためのざるを作っていました。

大きくなってからは海に出て漁をしていたので、沖に出られない日などに、自分の漁具に加え、近所の人に頼まれて日用品を作っていました。

その後、10年ほど前に足を悪くし、沖に出られなくなってきたら、竹細工を本業にしています。漁に出なくなると後、近所の人から製作を頼まれていたこともあり、せっかくなら専門でやってみようと思いい、個人の方から依頼を受け始め、今にいたります。

数年前までは個人的に注文を受けて作ることがほとんどでしたが、道の駅や店舗などから注文を受けて作ることも増えました。今はふるさと納税の返礼品も作らせてもらっています。

昔と比べると竹製品の用途も増えていて、古くから使用されている日用品のほか、花器やコーヒードリッパーなどの注文をいただくこともあり、時代の流れを感じます。

小学生の頃に父の手伝いでカゴやざるを作ったのが始まりです。昔は冷蔵庫などがなく、食べ物や冷やす時に日の当たらない涼しい軒下に吊るすことが多く、私も当時、その軒下に吊るためのざるを作っていました。



皮を小刀で剥いている様子



竹を編む澳本さん

90歳まで竹細工を続けることです。現在、注文を受けたり、商品の管理など細かな所は娘に任せていますが、お客さんの声をしっかりと聞きながら、喜んでほしい、大切に使用してもらえる竹細工をこれからも作っていききたいと思っています。

今後の目標は？

竹製品を作る時の「こだわり」は？

竹細工を作る時に使用する竹の皮と実をしっかり分けることです。竹細工に使用しているのは皮のみですが、実が残っていると、完成した時に見映えが良くなりません。お客さんに長く大切に使うためにも、作業の中で特に気をつけています。

竹の経年変化も楽しんでもらえたら嬉しいですね。